



大学入門ゼミ 小豆島一日研修 (2022年度 1年次生)



教育実習 (2021年度 3・4年次生)



大学近くにある
金毘羅神社の夏祭り



香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.10



附属学校園訪問 (2022年度 1・2年次生)



教職実践演習 (2021年度 4年次生/オンライン)

※感染症等対策として私語を控えるよう指導の上、
集合写真のみ、マスクを外して撮影しています。



2022年04月23・24日 小豆島一日研修 (1年次生)



2022年5～7月 附属学校園訪問 (1・2年次生)

PICK UP NEWS 令和4年度の実地教育は、授業も実習も対面を軸に進行中。

令和4年4月3日、香川大学教育学部は、167名の新1年次生を迎えました。実地教育関連授業である1年次「大学入門ゼミ」において、学生1人1台のノートPCを活用した授業を本年度も始めました。「ICTを活用し教える」前に、「ICTを活用し自分自身が学ぶ」経験を豊かにさせたいと考えています。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の低位感染状況を睨みながら、4月23日(土)・24日(日)に、壺井栄の小説「二十四の瞳」に学ぶ『小豆島一日研修』を、1年次生の授業の一環として実施することができました。昨年度・一昨年度は、授業時間外学修活動として希望者のみの参加と、規模を縮小して実施せざるを得なかった取組です。感染対策を施しながら限られた時間・場所での研修でしたが、1年次生たちは、大学生として新たな仲間との繋がりを深めながら、充実した1日を過ごしていました。

2年次生は、昨年度、附属学校園訪問を行うことができませんでしたが、本年度は5～7月期に、1・2年次生共に附属学校園を分散訪問しました。「教育現場を肌で感じ、考え、学ぶ」第一歩の大切な学修機会を、2年ぶりに復活実施させることができました。

3・4年次生の実地教育については、本年度、主免・基礎免学生の「教育実践演習(教育実習事前指導)」を対面で実施することができました。また副免学生を含めた附属学校園を訪問してのご指導を受けることもできました。教育実習へ向かう心構えや教育実習で求められる基礎的・基本的なところを、また社会人としてのマナー等についても学ぶことができたかと思います。まだまだ課題があるとは思いますが、本実習に参加することを通して、学びを深め、自己を成長させて欲しいと思っています。

センター長あいさつ／令和4年度 附属教職支援開発センター 事業計画／令和3年度 センター日誌	2
[特集] 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動	3
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 研究グループ報告	3～4
令和3年度 教育実践集中講座 実践報告(退任のごあいさつ)	5
令和3年度 センター公開講演会 報告	6
令和3年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告	6
速報:令和4年度 附属坂出小学校 合同研究会 報告	6
附属学校園 この1年～2021～	7～10
教育実践総合研究(第46・47号) 原稿募集	10

センター長 あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

一昨年からコロナ禍の影響は少なからぬものがあります。香川大学でも、授業等の多くがオンラインへと移行し、演習・実習・実験などの一部も、形態の変更を余儀なくされた等、様々な影響を受けてきました。実は同じことを昨年書いたのですが、残念ながら今回も書かざるを得ない状況です。加えて国内・国外で様々なことが起こり、憂鬱な日々が続いています。平穏な状況に戻るのはいつのことになるのでしょうか。

さて本センターでは、2019年4月から、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の4部門で事業を進めておりましたが、特別支援教室「すばる」の坂出から幸町キャンパスへの移転に伴い、2022年4月に⑤特別支援教育推進部門が設置され、5部門で事業を進めております。この新たな5部門体制での教員養成や教員育成に関する教育や研究及び事業をどのように考えれば良いのかは依然として大きな課題です。それぞれの事業固有の課題のみならず、今年度からの第4期中期目標・中期計画とも連動して考えていく必要があります。真摯に考えていきたいと思っております。

今後とも附属教職支援開発センターに、ご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

附属教職支援開発センター長
松村 雅文



令和4年度 附属教職支援開発センター 事業計画

- 1 実地教育推進部門(実地教育に関する管理及び運営)
 - (1)「大学入門ゼミ」「教職概論」(1年次)
 - (2)「教育実践プレ演習」(2年次)
 - (3)「教育実践演習」(事前事後指導)(3年次)
 - (4)「教職実践演習」(4年次)
- 2 教職支援推進部門(教職支援に関する管理及び運営)
 - (1)教職志望学生への日常的支援活動
 - ・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教授対応
 - (2)教職志望学生及び現職教員への教育相談活動
 - ・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
 - (3)教育実践集中講座の開催
- 3 教員研修推進部門(現職教員研修に関する管理及び運営)
 現職教員への研修支援活動
 - ・香川県教育センターとの連携研修の開催
 - ・NITS四国アライアンス(香川センター)連携研修の開催
 - ・小学校外国語のための免許法認定講習
 - ・教職リカレント教育プログラム(教育学部事業・香川大学教員免許状講習への協力)
 - ・香川大学教員免許状更新講習への協力
- 4 教育開発/ICT推進部門(教育開発に関する管理及び運営)
 - (1)教材・資料の収集・管理・活用支援
 - ・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
 - (2)ICT機器の活用支援
 - (3)研究活動の報告等
 - ・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
 - (4)関係機関との連携
 - ・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等
- 5 特別支援教育推進部門(特別支援教育に関する管理及び運営)
 - ・教育学研究科、教育学部における特別支援教育に関する教育活動への協力
 - ・特別支援教室の運営、業務の遂行
 - ・香川県教育委員会、高松市教育委員会、附属学校園、関係諸機関との連携
- 6 その他
 - (1)広報活動
 - ・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
 - (2)学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導

令和3年度 センター日誌

<前期>

4月10日(土) 特別支援教育実践演習 全体指導
4月15日(木) 教育実践演習 第1回全体指導
4月20日(火) 第1回 専任会議
4月22日(木) 教育実践演習 第2回全体指導
4月28日(水) 教特別支援教育実践演習 全体指導

5月06日(木) 教育実践演習 第3回全体指導
5月13日(木) 教育実践演習 第4回全体指導
5月18日(火) 第2回 専任会議
5月20日(木) 教育実践演習 第5回全体指導
5月22日(土) 教育実践集中講座(第一期1回目)
5月27日(木) 教育実践演習 特別指導

6月05日(土) 教育実践集中講座(第二期2回目)
6月07日(月) 第1回 編集会議
6月15日(火) 第3回 専任会議
6月21日(月) 第2回 編集会議
6月28日(月) 第4回 専任会議(メール審議)
6月30日(水) 教育実践プレ演習 第1回全体授業

7月01日(木) 第5回 専任会議(メール審議)
7月02日(金) 第1回 運営委員会
7月12日(月) 教育実践集中講座(第一期3・4回目)
7月15日(木) 教育実践演習 第6回全体指導
7月20日(火) 第6回 専任会議(メール審議)
7月28日(水) 教育実践集中講座(第二期5回目)
7月28日(水) 教育実践プレ演習 第2回全体授業

9月14日(火) 第7回 専任会議

<後期>

10月15日(金) 第99回 国立大学教育実践研究関連センター
協議会(オンライン開催:Zoom)
教育実践集中講座(第二期1回目)

10月19日(火) 第8回 専任会議
10月20日(水) 教育実践演習 第7回全体指導

11月08日(月) 教育実践集中講座(第二期2回目)
教育実践集中講座(第二期3回目)
教育実践集中講座(第二期4回目)

11月10日(水) 教育実践演習 第8回全体指導
教育実践集中講座(第二期5回目)
11月11日(木) 教育実践集中講座(第二期6回目)
11月15日(月) 教育実践集中講座(第二期7回目)
11月16日(火) 第9回 専任会議
11月26日(金) 教育実践集中講座(第二期8回目)
11月29日(月) 教育実践集中講座(第二期9回目)
教育実践集中講座(第二期10回目)

12月02日(木) 教育実践集中講座(第二期11回目)
12月06日(月) 第3回 編集会議
12月09日(木) 教育実践集中講座(第二期12回目)
12月13日(月) 教育実践集中講座(第二期13回目)
12月15日(水) 教育実践集中講座(第二期14回目)
12月20日(月) 第4回 編集会議
12月21日(火) 第10回 専任会議

1月24日(月) 教育実践集中講座(第二期15回目)
教育実践集中講座(第二期16回目)
1月18日(火) 第11回 専任会議
1月31日(月) 教育実践集中講座(第二期17回目)
教育実践集中講座(第二期18回目)

2月03日(木) 特別支援教育実践演習 第4回全体指導
2月07日(月) 教職支援推進部門会議
教育実践集中講座(第二期19回目)

2月10日(木) 第12回 専任会議
2月18日(金) 第100回 国立大学教育実践研究関連センター
協議会(オンライン開催:Zoom)
2月25日(金) 実地教育推進部門会議(メール審議)
~3月03日(木) 教員研修推進部門会議(メール審議)
教育開発/ICT推進部門会議(メール審議)

3月01日(火) 2022年度学部・附属学校園教員合同研究会
(オンライン開催)

3月03日(木) 第13回 専任会議
3月08日(火) 第2回 運営委員会

※上記の他、実地教育科目(1年次「教職概論」/2年次「教育実践プレ演習」/3年次「教育実践演習(教育実習事前事後指導)」/4年次「教職実践演習」等)のコーディネート・指導を行いました。



特集 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

第21回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

副学部長(学部附属連携担当) 高木 由美子



2021年度の研究集会は、昨年度同様オンライン開催となりました。今年度も総務系の藤澤さんをはじめ関係の皆様のご協力のもと無事開催することができましたこと、心より感謝申し上げます。

2021年度学部・附属学校園教員による共同研究プロジェクトは、12件の応募があり、5件は、学長戦略経費(ICT関連事業)からの配分に切り替え、残り7件について研究費を配分し、共同研究を進めていただきました。その成果は要旨集録へ掲載し、公開いたしました。研究概要を本誌にもご報告いただきましたのでご覧ください。



研究集会ホスト会場

合同研究集会は、令和4年3月1日(火)15:30から開催いたしました。第3期の中期目標・中期計画の集約及び第4期の中期目標・中期計画を見据えた議論を行うということで、テーマを「連携・協働による実地教育と研究の成果と課題」としました。

第1部では、実地教育に焦点を当て、学部及び各附属での取り組みについて情報共有いたしました。松村先生のご進行で、実地教育委員長の永尾先生に「コロナ禍での実地教育と次年度への展望」、教職支援開発センターの松下先生に「ICT教育とコロナ禍での実地教育」ということでお話しいただきました。

第2部では、「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」の総括をし、今後の共同研究のシーズ醸成のために、各附属学校園の研究提案の紹介いただきました。(高小:前場先生、高中:小野先生、坂小:竹森先生、坂中:渡辺先生、特支:松下先生、附幼:藤井先生、高松園舎:植田先生)

第4期、附属学校には、学校教育の水準の向上のために、学部・研究科と連携し、実践的な実習・研修の場を提供するとともに、先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することが求められています。今後より一層強固な連携教育を進めていきたいと思っています。

研究グループ報告

※大学教員は、研究代表者のみ記載。以下同じ。

中学校社会科における経済的見方・考え方の向上をめざす経済学習単元の開発に関する研究—経済学理論導入の試み—

鈴木正行[※]、附属高松中、附属坂出中

『小学校学習指導要領』・『中学校学習指導要領』(平成29年)・『高等学校学習指導要領』(平成30年)では、経済的見方・考え方が一層重視されるようになった。小学校3年生の商店の仕方の単元では、それまでのほとんどの授業実践が「人々の工夫や努力」に留まっていたことに対して、「売り上げ=利益」に着目させることが求められ、中学校公民的分野では、新たに「投資」に関する学習が導入された。高等学校公民科においては、ゲーム理論・思考実験が取り入れられている。そこで本研究では、経済学習の手がかりとして、小学校・中学校社会科、高等学校地理歴史科・公民科の各学習指導要領や教科書から、社会的見方・考え方や経済的概念・用語を抽出して一覧表にまとめた。その上で、経済的見方・考え方の育成・向上を図ることをめざし、香川県の特産品である和三盆糖、ならびにイノベティブな産業資源として発展が期待される希少糖を題材として単元開発を行った。



搾汁のようす(『讃岐国白糖製造乃図』
『大日本物産図絵』)と、希少糖含有シロップ

中学校理科新課程教科書の研究：教員養成との関連において

高橋尚志[※]、附属高松小・中、附属坂出小・中

本プロジェクトは、中学校新学習指導要領下の新しい理科教科書と旧課程教科書との比較検討および自然科学諸分野の学術的および教育的研究の進展を踏まえた見地からの妥当性吟味の作業を行い、今回の学習指導要領の改訂の意味を考察し、同時に中学校教員養成における今日の課題を明らかにすることを目的としたものである。

教育学部理科領域および理科授業担当の教員全員が分担して各専門分野に関連する中学校理科教科書の内容を検討している。また、今次の理科学習指導要領改訂の大きな特徴である「探究」の重視についても、その趣旨と危惧される問題、教科書におけるその強調の反映について考察している。

(→右図「新教科書に掲載されている「探究の過程」の図式(啓林館)」参照)

全体のまとめの会および附属小・中学校理科教員との意見交換の作業は当初の予定より遅れており、今後の報告作成作業に向けて早急に行う予定である。



令和3年度
教育実践集中講座
実践報告

令和3年度
センター公開講演会
報告
令和3年度国立大教育実践研究推進センター協議会報告
(附属小・附属高松園舎)

附属学校園
この1年2021
附属高松小・附属坂出中
附属高松中(附属坂出中)

園内環境の再考 ～探究型園内研修を通して～

片岡元子^{*}、附属幼、附属幼(高松園舎)

高松園舎において、各保育者の探究の過程を共に学び合う「探究型園内研修」を試行し、その有効性について検討した。この時、園の特定の場(通称“カリンの森”)に視点を当て、子どもの具体的な姿や遊びの様相を通して、園の環境のもつ良さや特性について改めて考えていくことを探究テーマとした。保育者集団は、探究を通して「自然豊かで素晴らしい」と言われてきた園環境がどのように豊かであるのか考え、子どもたちがどのように環境にかかわっているのかを深く見取っていくことの重要性に気付くことができた。また、「探究型園内研修」の実施により、各保育者の探究による気づきや学びについての語りを面白がって聞こうとする姿勢を生み、互いの見方や考え方を認め合い高め合う関係をつくる可能性が示唆された。今後、さらに探究していく楽しさや手応えを感じられるような実践について検討していきたい。その際、保育者集団のより主体的・協働的な取り組みをめざしたい。



現職教員から見た中学校技術家庭科技術分野の教員養成

黒田 勉^{*}、附属高松中、附属坂出中

本研究では、現職の教員が持つ「技術分野の在り方」、「技術分野の教育の考え方」を中心にアンケートによる回答から問題点を明らかにし、今後の教員養成段階での技術科教育の考察、ならびに学生の教科内容への指導方法についての検討を行った。現職教員へのアンケートの調査項目の結果より、今後の学部での技術領域の教育は、従来の教授法に加え、以下の事項を中心に進めていく必要があると考えられる。

領域A:指導要領の文言を基にした知識を修得し、加工を行い製作品を作成する実践型講義への連携

領域B:生物育成や管理を職業として実際に行っている現場の訪問や実地体験を通じた講義

(→右図「栗林公園で植生の管理者の話を聞く学生たち」)

領域C:従来の工具等の使用における安全教育に加え、学校全体に関わる防災や安全指導

領域D:小学校で行われるプログラミング教育を基にした更なる展開が図れる講義
教育実習以外の実体験を含む講義として、研究授業の見学とその討議への参画



鑑賞教育における「なりきり鑑賞」の教材の有用性

吉川暢子^{*}、附属坂出中

中学校美術科における表現に関する資質・能力を高めていくことを目的として鑑賞の学習との相互の関連性を図りながら指導していくために「つくる」と「みる」が一体となった教材の開発を行ってきた。本研究では「なりきり鑑賞」の実施が生徒の学びや鑑賞に対する意識等にどのような影響を与えたのかについて調査し、「KH Coder」を用いて分析を行なった。その結果、授業を受ける前と後で美術や美術鑑賞に対するイメージに関する質問に「変わった」と選択した生徒(附属坂出中学校2年生)は75%であった。「なりきり鑑賞」において、単に「なってみる」というパフォーマンス的な要素だけでなく、「なってみる」ことで絵画作品の内側に入り込み、「表現」と「鑑賞」を繰り返すことで学習した経験と知識を往還的に取得していたと考えられる。それは、単に「つくる」「描く」「みる」といった美術教育の学びに留まらず、自らの問い(主題)を発見する「アート思考」の獲得へ繋がっていくことが示唆された。



「領域および保育内容の指導法(言葉)」から捉える幼小接続

松本博雄^{*}、附属幼、附属幼(高松園舎)

附属幼稚園と高松園舎にて継続的に実施してきた、書き言葉をはじめとする子どもの表現に焦点をあてたアクションリサーチ「ぶんつうプロジェクト」は3年目を迎えた。令和3年度は当初、プロジェクトの成果をもとに、幼児期の生活・遊びの様相と書き言葉の発達の結びつきを示す資料を教育学部専門科目である保育内容の指導法(言葉)の受講生と作成し、附属幼稚園教員の助力を得て、幼小接続期における子どもの発達と学びの連続性を示す資料として活用することを企図していた。しかしながら新型コロナウイルス感染症の広がりにより計画を変更せざるを得ず、これまでと同様のプロジェクトの実施を中心に研究を進めた。4歳児から5歳児にかけて書き言葉によるやりとりを発達させていく子どもたちの姿は、本年度も幅広く認められた。そのような経験を経た子どもたちが小学校入学以降にどのような姿を示すか、それを支える幼小接続期の保育・教育実践における環境構成・活動設定のポイントについて、本年度も引き続き検討を進める計画である。



【お詫び】 研究番号⑥「防犯ボランティアとの協働による地域安全マップ作成活動の教育効果の検証」(大久保智生^{*}、附属高松小、附属坂出小)については、研究報告のご寄稿がありませんでしたので、研究報告の掲載ができませんでした。

令和3年度 教育実践集中講座 実践報告

いざ!教職の道へ

小山 圭・藤原 由宜・岡 静子

第一期
(4~9月)

- [第1回] 5月22日(土)教育法規Ⅰ
「教員になる①」(小山)
「教員になる②」(藤原)
- [第2回] 6月5日(土)教育法規Ⅱ
「教員になる③」(小山)
「教員になる④」(藤原)

- [第3回] 7月12日(月)道德教育
「道德科の多様な授業づくり
～心を耕す道德の授業～」(藤原)
- [第4回] 7月12日(月)学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」(岡)
- [第5回] 7月28日(水)子ども理解
「附属学校参観の心構え」(小山)

第二期
(10~3月)

- [第1回] 10月15日(金)教育課題の探究
「いじめ問題の現状と課題」(藤原)
「教員としての倫理観」(岡)
- [第2回] 11月8日(月)教職理解
「教職を知る①(中学校)」(藤原)
- [第3回] 11月8日(月)教職理解
「教職を知る①(小学校)」(岡)
- [第4回] 11月8日(月)教育の最新情報
「教師に求められる力」(小山)
- [第5回] 11月10日(水)教育実習事後指導
「教育実習を振り返って」
シンポジウム・助言(藤原・岡)
- [第6回] 11月11日(木)生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「中学校の事例を中心に」(小山)
- [第7回] 11月15日(月)学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」(岡)
- [第8回] 11月26日(金)
校種別による選択実務研修
「はばたけ若き力を生かして
～4月からの心がまえ～」
中学校(葛西)・小学校(岡)
- [第9回] 11月29日(月)教職理解
「教職を知る③(中学校)」
教師のメッセージが伝わる環境の整備
～「学級通信・背面掲示」を知ろう・考えてみよう～
(藤原)

- [第10回] 11月29日(月)教育の最新情報③
「教育課程と学校評価」(藤原)
- [第11回] 12月2日(木)生徒指導・進路指導
ケーススタディ「中学校の事例を中心に」(藤原)
- [第12回] 12月9日(木)生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校における生徒指導の実践」(岡)
- [第13回] 12月13日(月)教職理解
「授業について考える
よい授業とは・よい保育とは」(小山)
- [第14回] 12月15日(水)人権教育
「学校教育における人権教育
小学校での取組事例に学ぶ」(岡)
- [第15回] 1月24日(月)道德教育
ケーススタディ
「道德科の多様な授業づくり
～心を耕す道德の授業～」(藤原)
- [第16回] 1月24日(月)子ども理解
「場面指導(ロールプレイ)」(岡)
- [第17回] 1月31日(月)子ども理解
「場面指導(ロールプレイ)」(岡)
- [第18回] 1月31日(月)教育の最新情報
「学級で育つ子どもたちのために」(岡)
- [第19回] 2月7日(月)子ども理解
「場面指導(ロールプレイ)」(岡)



小山 圭先生



藤原 由宜先生



岡 静子先生

「いざ!教職の道へ」を体感した6年間

岡 静子(前・附属教職支援開発センター 客員教授)

3月末の教職員人事異動発表の数日後、新しいスーツに身を包み、清々しい表情の初任者の先生をお迎えする時の気持ちは、管理職としても期待でワクワクするものでした。その私が、退職と同時に教職の道に就く学生の皆さんに「魅力ある教師をめざして」「そのために、大学生活で頑張りたいこと」「魅力ある教師の前に魅力ある教師になるために」等々、現場での実践を踏まえてお話をさせていただきました。

平成28年から6年間、大変お世話になりました。学生の皆さんの真摯な態度を見ていて、この人が、赴任してくれれば、この人が、課題を抱える子供たちの学級担任になってくれたらといても、そのような気持ちになっていました。それだけ、学生のみなさんに熱意と迫力を感じました。また、センターで指導にあたられる先生方の懇切丁寧なご指導に頭が下がる思いでした。このような大学の先生方の中だからこそ、香川大学出身の若い先生方が、力を付けてき、伸びていることが、納得・実感できました。センターの事務所に電話をさせて頂いた時の電話の向こうでの応対、ドアをノックした時の感じのいいお迎え等々、学生の皆さんに学んでいただきたい場所でもありました。

教育は、小さな指導の積み重ねです。あせらず一歩一歩着実に。学びの原点は聴く力。子どもたちの背景を、しっかり見つけ、指導力を高めて行って下さい。貴重な経験をさせていただいたことに感謝を申し上げますと共に、学生の皆様が、児童生徒、保護者の方々から信頼される教師になられることを応援しております。



令和4年度教職センター事業計画・令和3年度センター日誌
学部教員と附属学校教員の協働による研究活動
研究グループ報告

令和3年度教育実践集中講座実践報告
研究グループ報告

令和3年度センター公開講演会報告
令和3年度国立大教育実践研究関連センター協議会報告
(附属学校園この1年2021
附属幼・附属高松園舎)

附属学校園この1年2021
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

令和3年度 センター公開講演会 報告

「再考：小学校英語教育の役割」 「今、求められる指導と評価の在り方」

講師：香川大学教育学部 中住幸治先生

講師：鳴門教育大学 佐藤美智子先生

令和3年9月18日(土)、独立行政法人教職員支援機構の受託事業「独立行政法人教職員支援機構連携教職大学院を対象とする地域センター支援事業」として実施される「英語ラボ2021研修会」が、「小学校英語における指導と評価の一体化を目指した授業づくり」とテーマとして、当初のハイブリッド形式から全面オンライン形式に変更して開催しました。

令和3年度の「英語ラボ」は、小学校英語が教科としてスタートして2年目となる中、まず香川大学教育学部の中住幸治(筆者)が『再考：小学校英語教育の役割』という表題で講演を行いました。小・中・高の10年にわたる英語教育のスタートラインとしての小学校英語教育の視点とともに、「ローマ字・音声指導」に関する留意点等に触れた。

続いて、鳴門教育大学の佐藤美智子先生より『今、求められる指導と評価の在り方』という演題でご講義を頂きました。主に①学習指導要領が求めるもの(小～中学校)、②授業づくりのポイント、③評価の在り方、についてその場でのやり取り実演、授業実践例の動画提示、ブレイクアウトルームの活用等、様々な視点から小学校英語教育への示唆を頂きました。参加者からは「指導者として必須の情報が多かった」「小学校の先生方が多くの不安や疑問を持ちながら指導にあたっている中、分かりやすく説明していただいた」「ICT教材の可能性についても十分に感じる事ができた」「他の学生・先生方と意見交流ができて良かった」等のご意見をいただきました。

(文責：中住幸治/香川大学教育学部)



※画像は、当日の講演会において、オンライン配信された映像をキャプチャしたものです。

令和3年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

本年度のセンター協議会も、オンライン協議会として2回開催されました。これまで通り体制、会計及び予算に係る審議・報告の後、協議・報告として、話題提供やセンターの取り組みが報告され、質疑・応答が行われました。午後からは、各センターからの報告が行われ、それらも踏まえて今後の取り組みや会の方向性について意見交換が行われました。本年度の協議・報告を以下に示します。

<第99回・令和3年10月15日(木)>

- コロナ禍での不登校と自主休校の増加 何が課題なのか? 何が必要なのか?(小林正幸氏・東京学芸大学)
- GIGAスクール構想の現状
 - 三重県内のGIGAスクール構想取り組み状況(須曾野仁志氏・三重大学)
 - 学びセンターと県教委の連携による長野県GIGAスクール構想の現状(森下孟氏・信州大学)

<第100回・令和4年2月18日(金)>

- 三重大学での教育情報化セミナー報告(岡野昇氏・三重大学)
- 教員養成に携わる大学教員の意識調査中間報告(土田雄一氏・千葉大学, 長谷川哲也氏・岐阜大学)
- 実践のエネルギーが生み出したもの(小林正幸氏・東京学芸大学)

近年の各センターからの報告では、各大学で進められているセンターの再編とセンターの役割について多く報告されています。とりわけ教職大学院との関係において制度的な再編が進みつつあることがわかります。そうした現状において、香川大学のように、センターの役割の第一として学部の実地教育推進に当てているところは、大きな特徴になるように思われます。本センターには近年多くの役割が求められてきていますが、この実地教育推進を初心として大切に、センターの役割に応えられるよう努力、貢献していきたいと考えています。

(文責：山岸知幸)

速報：令和4年度 附属坂出小学校 合同研究集会 報告

2022年6月24日、附属坂出小学校にて附属坂出小学校教員と大学教員との合同研究集会が開催されました。本研究集会もコロナ対応として、昨年度・一昨年度、実施を見合わせた取り組みです。参加した大学教員は、附属坂出小学校の本年度研究課題などについて説明を受けた後、6年生社会科の授業を参観し、授業討議に参加しました。提案授業では、授業支援システム上に自分の考えをまとめ話し合うなど、一人一台のタブレットパソコンを活用して考える子どもたちの熱心な姿がありました。(文責：松下幸司)



2021 附属学校園 この1年

香川大学教育学部の各附属学校園より、2021年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

附属幼稚園

附属幼稚園 研究経過報告

研究主題 保育を楽しむ保育者を目指して(仮題)

1 研究主題について

働き方改革や保育の質が、これまで以上に求められるようになってきている。全教職員で業務の大変さを洗い出し、ながら業務改善を行い、子どもと向き合う時間や体制の充実、やりがいに変えていこうと取り組んできた。また、そのことが保育の質の向上にどうつながっていくのかについて追究していく。

2 研究の内容と成果

○計画(教育課程、指導計画)の見直し

各担任が、膨大な時間をかけ頭を悩まして週案を作成するものの、実践にあまり生かされていないという実態があった。そこで、計画の意味を確認するとともに内容の精選を行った。また、教育課程・長期の指導計画についても、翌月の内容確認や毎月末の内容の検討・修正を行った。このことより、保育者の負担軽減と常に改善を図りながら保育や保育者(集団)の質の向上を目指そうとする意識が高まった。

○人的・物的環境の見直し

子どもが見せる姿は、保育者自身や保育者がつくった環境にその要因がある場合が少なくない。保育者が自分自身の傾向に気付き(自分理解)ながら幼児理解を深めたり、活動や行事等のねらいを職員集団で再確認したりし、子どもと共に環境の見直しを行った。この見直しの過程の中で、「保育を楽しむとはどういうことか」をそれぞれに見出していくことができた。

○情報発信の見直し

保育記録、事例、しんぶん、クラスだより、あゆみ、ホームページなど、それぞれ何のために書くのか、その目的を明確化し、精選を図った。特に、クラスだよりやホームページによる月1回の情報発信を、InstagramやFacebookによる毎日の投稿に変更したことは、リアルタイムな情報発信、子育て支援、保護者との連携、業務改善など、保育の質の向上につながる多くの成果が得られた。



【子どもと共につくる園生活】

3 今後の研究課題

「保育の質」はプロセスの質である。保育を楽しむようになってきたプロセスをPDCAサイクルの中に整理し、保育の質の向上にどうつながるのかについてまとめていきたい。

附属幼稚園 高松園舎

高松園舎 研究経過報告

研究テーマ 「ああしたい」「こうしたい」の実現に向けて ～子どもの感性を育む木育を通して～

高松園舎の特色は緑あふれる素晴らしい環境である。令和3年度、この環境に新たな木製遊具が設置されることになった。そこで子どもたちの「ああしたい、こうしたい」の思いを大切に、その設置過程において、木育を位置付けて様々な活動に取り組んできた。また、教育学部、創造工学部、農学部の研究者の先生方にも関わっていただき、木材の香り分析の効果や木製遊具の工法と維持管理や安全性、子どもへの発育や遊びへの影響、遊具の安全点検DVDの開発等の実証研究を行った。ここでは、保護者へのアンケート調査の一部を紹介する。



【第3回木育ワークショップでの活動(R3.12.9)】

表1 幼稚園以外での普段の遊びの様子

項目	平均	標準偏差
木製の大型遊具で遊ぶ機会がある	2.79	1.25
木製の小型玩具(例:積木)でよく遊んでいる	3.60	1.16
木材を使って遊ぶ(例:木工)機会がある	2.30	1.19
自然物(草花・枝葉・生物など)でよく遊んでいる	3.72	1.26
紙や木、廃材などを使った製作遊びをよくしている	4.28	1.11

表2 木や木材への保護者の印象・理解度

項目	平均	標準偏差
木や木材製品のよさを再認識することにつながった	4.40	0.73
山や森林、環境に対して、もっと知りたくなった	4.00	0.98
木から出るにおいや、木のもつ温かさなどをより意識するようになった	4.40	0.73
自分も生活の中で少しでも木材製品を活用してみようと思った	4.11	0.92

(「あてはまらない」「あまりあてはまらない」……「あてはまる」の5件法:各1~5点を付与)

さらに、木製遊具に関する子どもの声の代表的なものとして「木の香りがする」「木の香りはとてもいいにおい」「さらさらして気持ちいい」などの、素材としての木材の特徴に関わる内容がみられた。これらは木育ワークショップで展開された、木のおい触感に焦点をあてた取り組みが関わっていると思われる。実際にワークショップの中でも「ほら、こっちがつるつるでこっちがざらざら、なんでだと思う?(5歳児女児:ヤスリがけした木材に触れながら)」「(木には)とげやささくれがある(5歳児男児)」といった触感に関わる言葉や、木の香りの違いに関わる発見を大人に伝えるなどの、子どもたちの具体的な言葉を数多く聞き取ることができた。

① 研究主題について

本校は、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。これからの先行きが不透明な社会では、価値観や年齢の違い、はじめて会った人とも分かち合いながら、未知の問題を解決するために新しい知や価値を生み出すことが必要になると考えます。私たちは、どんな時代、場所、集団においても、夢や憧れをもち自律的に学び続ける力、ひともの・ことへ共感的・協同的に関わる力、問題を解決し知や価値を創造する力等を発揮しながら、仲間と共に最適解を探っていく子どもこそが、研究テーマに掲げる人間像であると考えています。

② 研究内容について

令和3年度は、これまでの課題を踏まえて、「はっけん」の時間と「じぶん」の時間を創設しました。

「はっけん」の時間は、異学年集団で多様な「ひともの・こと」との出会いを通して、学問につながる個の生活知を豊かにすることを目指します。「はっけん」の時間で獲得した生活知は、教科学習での知識と有機的につながり、知を再構成していくことに効果的に働きます。

「じぶん」の時間は、体験をもとに、同学年集団で議論を深め、価値の創造を目指す時間です。価値の尺度が劇的に変化するとされる不透明な時代の中、他者との協働により、既存の知識や価値から新しい価値を生み出していくといったプロセスは、これからの社会に合った新たな価値創造のかたちになり得ると考えています。

さらに今年度は、「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム実践研究校」として、文部科学省の委託研究を受け、主権者教育につながる縦割り創造活動や社会科の在り方についても研究を深めてきました。

それらの成果を、初等教育研究発表会で公開を致しました。令和2年度に引き続き、コロナ禍での開催となり、2月3日（木）は、Zoomを活用し録画した授業動画を配信した後に、分科会を行うという形で行いました。また、2月4日（金）は、参観者なしで開催し、当日授業の様子を録画し、後日配信を行いました。また、アンケートフォームの活用により、県内外の先生方から様々な意見や感想をいただくことができました。

初等教育研究発表会の取り組みは、地域教育の拠点校として、コロナ禍の中での研修の在り方という視点においても、全国に発信ができたと考えています。

③ 今後の研究について

本校は、令和4年度より4年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けました。研究課題は、『個の生活知を豊かにする新領域「経験」と、体験を価値の創造につなぐ「じぶん」の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発』です。新しいカリキュラムのもとで、子どもたちが生き生きと学習に取り組む姿が発信できるよう、今後も研鑽を深めていきたいと考えています。



【「はっけん」の時間】

【「じぶん」の時間】

研究主題

自ら学び続ける子供の育成 ～個に応じて、「さ・ぬ・き力」を育てる環境づくり～

1 研究主題等について

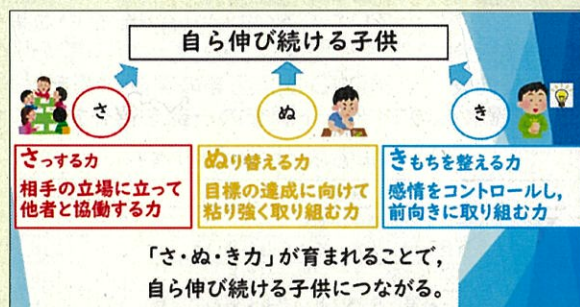
本校では平成28年度から学習意欲に着目して研究を行っています。子供の学習に対する関心や自信を高めながら、メタ認知を促すことにも取り組んできました。それらの研究を生かしつつ、課題解決の流れに沿って、目指す子供の姿を考え、「自ら課題を見付け、主体的に解決に向かう子供」「他者と適切にかかわり、困難だということにも挑戦していく子供」「自分の力を高め、学ぶ価値を実感したり、生み出したりする子供」の姿を目指していきたいと考えました。

自ら伸び続ける子供を育成するために、私たちは非認知能力に着目しました。非認知能力は、予測困難な社会において、課題を主体的に設定し、自力で、または他者と協働することを通して解決していくために、必要な能力であると考えます。また、非認知能力が育つことによって、認知能力も相互作用的に高まると考えています。そして、この非認知能力の一部を本校では「さ・ぬ・き力」（右図参照）と置き、研究を進めています。

2 研究内容とその成果

令和3年度は、各教科の授業を中心にしながら、特別活動や総合的な学習の時間などでも「さ・ぬ・き力」を育てるために、活動や場所、教具などの環境づくりについて研究実践を積んでいます。また、子供が「さ・ぬ・き力」を発揮したことに気付き、その後も発揮できるような価値付けの在り方、個の気質に応じた支援についても研究を進めているところです。

これまでに、授業の各場面における働きかけのポイントを見出し、整理することができました。今後は、価値付けの対象を吟味したり、環境づくりの場を学校のエデュケーション全体に広げたりすることを検討しています。



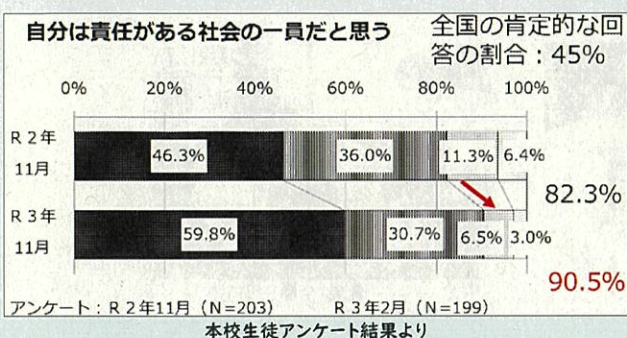
附属高松中学校

本校の研究について

研究主題

精神的に自立した人間の育成
—「教科する教科学習」と「人間道德」の実践を通して—

第8期の研究テーマ「学校を問い直す」のもと、令和3年度の研究を進めました。教養を身に付ける「教科する教科学習」と省察性を高める「人間道德」を軸に、精神的に自立した人間の育成を目指しました。教科学習では「生徒は教科しているか」という視点で互いの授業を高め合いました。人間道德ではプロジェクトの成功を目指すことと、省察することを大切に、自己の生き方・在り方を問い直す授業をデザインしました。このような教育研究の実践によって、精神的自立に近づいた生徒の姿やデータ上の変化が見られるようになりました。



「教科する教科学習」のイメージを伝えるプレゼンテーションより



「人間道德」のイメージを伝えるプレゼンテーションより

(令和4年3月1日 合同研究集会)

令和4年度教職センター事業計画・令和3年度センター日誌
学部教員と附属中学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

令和3年度教育実践集中講座 実践報告
研究グループ報告

附属坂出中学校

本校の研究について

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び
—語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案—

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきた。今期は、前回大会までの研究を継承しつつ、カリキュラム全体で「自己に引きつけた語り」を生み出す授業実践を行っていくことで、生徒の学ぶ意味や価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける生徒を育成することをめざしている。

語り合い、探究する学びの過程を経ることで、生徒が課題に向き合い、思考を巡らせ、自己や他者に問い、学んだことを自分のものにしていくことにつながると考える。今期の「ものがたりの授業²⁾」づくりでは、①単元における「授業者のねがい」の設定、②「自己に引きつけた語り」を生み出すための単元構成の2点に重点を置いて実践研究を進めた。

また、平成30年度より研究開発学校指定を受けた「共創型探究学習(CAN・シャトル)」は4年次を迎え、今期は、「異学年の小集団編成による影響(生徒の能動的な成長)」「探究課題の設定・追究における教師の関わり」に重点を置いた研究を行った。具体的には、経験の差ができた異学年による小集団活動を通して、各立場(見習い・弟子・師匠)が生み出す意識や能力の高まりを調査するとともに、どのような教師の関わりが有効かを検証している。また、「探究深化シート」や「ToDoリスト」を活用しながら教師の共通した関わりとその効果についても実践検証している。



【語り合い・探究する生徒】

- 「語る」行為の中でも、特に出来事(題材)と自己との関連を見つめ、時間軸の中でそれを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。
- 「ものがたり」の考え方を取り入れた授業で、他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、筋立てが変わり、学ぶことの意味や価値を実感していく授業。

令和3年度国立大教育実践研究関連センター協議会報告
附属坂出中学校園この1年2021
(附属幼・附属高松中・附属坂出中)

附属坂出中学校園この1年2021
(附属高松小・附属坂出中・附属高松中・附属坂出中)

研究主題

卒業後の豊かな生活を支える身体の姿勢・動きの改善
～小・中・高をつなぐ学習内容の充実をめざして～

令和3年度より児童・生徒の“身体の姿勢・動き”の改善をめざした研究がスタートしました。本校には片足で体を支えられない、小さな物につまずいてすぐに転んでしまう、ボールを投げるのが苦手など基本的な運動技能に困難さがみられる児童・生徒が多く在籍します。また発達障害の特性に加えて協調運動障害がある場合には生活や学習での「困り感」が増すことから、発達性協調運動障害(DCD)にも着目しました。児童・生徒の感覚の課題や運動の実態を把握するために6種類のアセスメントを実施し、そのうち2種類は同じ質問項目に保護者と教員で回答しました。両者でこどもの課題への理解を深めながら、今年度はアセスメントの分析結果に基づき、個別最適な改善に向けた検討と実践を重ねます。さらに得られたデータはこどもたちを支える校外の機関や専門家と共有し、連携しながらより効果的な指導について模索します。

令和3年度に実施した研究授業では、運動の目的の一つである「動きを通して学ぶ」(認知面や情緒面の発達)ことにも目を向けました。例えば中学部の職業・家庭では「拭きりんピック」を開催して「畳む」「折る」「拭く」の3技能の習得を目指し、音楽では1グループ3名でキーボードによる合奏に取り組み、成果を発表する等の内容を実践しました。



アセスメント:片足立ち



職業・家庭:「拭きりんピック」



音楽:合奏

教育実践総合研究(第46・47号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第46号は2022年11月30日(水)原稿受付締切、
第47号は2023年5月31日(水)原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1(投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2(投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3(投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4(投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5(投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は24字×44行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6(刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7(投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

(1)採録 (2)条件つき採録 (3)返戻

8(校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則 本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則 本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則 本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則 本要領は、平成27年4月1日から施行する。

附則 本要領は、令和3年12月20日から施行し、令和3年6月1日から適用する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 10)

発行日 令和4年7月20日 代表者 松村 雅文

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

<https://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>



※端末の機種・OS等により、QRコードを読み込んだ際、当センターWebサイトにうまくアクセスできない場合があることが、発行直前に明らかになりました。Webサイトが適切に表示されない場合は、お手数ですが、上記URLを入力いただきますよう、お願いいたします。(次号にて改善掲載の予定です。)